

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2014年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科 助教	熊上 崇 印
研究課題	学習困難を有する高校生への認知・習得度アセスメントとフィードバックに関する研究	
研究期間	2014年度	
研究経費	(支出金額) 457743 円 / (採択金額) 465000 円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究がカバーする学問分野は高校生年代の特別支援教育学である。これまで知的障害や自閉症などの障害を有する生徒に対しては、その障害に応じた支援や指導が行われているが、IQ(知能指数)が70前後から80の間にある、知的障害とはいえないが知的能力にハンディのあるグレーゾーンにいる生徒は、学校での不適應感、無力感を抱きやすい。かれらの学校適應、不登校防止、自尊心や自己効力感の向上のためには、かれらの認知特性や学習習得度を詳細にアセスメントしたうえで、各々に適した学習法や指導法を提供する必要がある。そこで、本研究では、わが国で初の認知特性と学習習得度をアセスメントする個別式の標準化された検査である日本版KABC-II(Kaufman Assessment battery for children,2nd)を用いて、アセスメントと生徒・教員へのフィードバックを行う。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 日本版KABC-II } { 特別支援教育 } { フィードバック }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

公立 A 高校 1 年生の 1 クラス生徒 29 名 (男 15 名, 女 14 名) に対して、わが国で初の個別式の発達・学習習得度検査である日本版 KABC-II を実施し、その結果を生徒にわかりやすく説明するフィードバックシートを開発し、生徒の認知発達に関する自己理解を促し、学習の意欲を高める研究実践を実施した。

結果

生徒 29 名分の認知総合尺度は、平均が 79.4 (SD 9.2) であり、標準化データの平均より 1SD 以上低かった。認知 4 尺度は、継次処理尺度 84.8 (SD 9.2), 同時処理尺度 79.9 (SD 13.3), 計画尺度 80.4 (SD 11.1), 学習尺度は 90.8 (SD 13.1) であった。習得尺度では、算数尺度 69.4 (SD 4.6), 「数的推論」64.6 (SD 9.7), 「計算」66.6 (SD 5.9) と、いずれの尺度の標準得点も標準化データの平均より 2SD 以上低かった。

生徒の得意な認知方略について調べた結果は、継次尺度と同時尺度の標準得点を比較してタイプ別に分類したところ、継次尺度が同時尺度よりも 5% 水準で統計的に有意に高い「継次処理優位タイプ」は 8 名 (28.5%), 同様に同時尺度が継次尺度より 5% 水準で有意に高い「同時処理優位タイプ」は 3 人 (10.7%) となった。

認知総合尺度と算数尺度の下位検査である「数的推論」, 「計算」の各得点の差と、5% 水準での統計的有意差のある人数は、表 6 のとおりである。

認知総合尺度と「数的推論」の差の平均が 14.2, 「計算」との差の平均は 12.5 であった。また、認知総合尺度に比して、「数的推論」が統計的に有意に低い生徒の割合は 74%, 計算については 64% であり、このクラスの生徒には、知的能力と算数関連の習得度の差が大きい傾向が見られた。

生徒へのフィードバック面接

A 高校の教員と協議の結果、生徒に対しては、KABC-II の結果から得点を除き、各自の得意な認知方略を強調して示した「学習アドバイスシート」を作成した (学会発表にオリジナル版を記載)。

このフィードバック用のシートを作成した理由は、KABC-II の結果報告書は専門家や指導者向けであり、検査を受けた生徒本人や保護者にも理解できるシートを作成することが重要と考えたためである。

なお、本稿で提示した「学習アドバイスシート」は、認知 4 尺度、習得 4 尺度がすべて記入されているが、今回の A 高校での検査は、習得検査は算数検査 (数的推論, 計算) のみ実施したので、算数尺度だけを記載してある。

この「学習アドバイスシート」をもとに、筆者らが生徒 1 人につき 20 分程度の個別面談を実施して、生徒それぞれに合う、授業の取り組み方や学習の仕方について説明した。

説明の際には、まず認知 4 尺度のグラフを見せて「これは得意な認知の仕方、あなたの脳の働き方を表したグラフです」などと説明した。

継次処理と同時処理を説明する際に、例えば「野球を教わる時に、ビデオや画像で見るなど、全体的・視覚的に学習するのが得意なのが同時処理、一つ一つ技術を段階的、分析的に学習するのが継次処理、あなたはどちらのタイプですか?」などと聞いて、まずは自分の得意な認知方略を確認し、そのうえで KABC-II の結果を示して、実際にどちらの処理方略の傾向があるかを伝えた。

研究成果の概要 (つづき)

そのうえで、算数・数学の勉強法についても生徒に説明した。この際に「長所活用型指導で子どもが変わる Part3」(藤田, 熊谷, 柘植ほか, 2008)を参考にして、継次処理優位の生徒には「手順表」を示して、手順をまず書いて理解したうえで練習をしたほうが、やみくもに計算練習をするよりも理解しやすいと説明した。また、「同時」優位型の生徒に対しては、方眼紙などを用いた計算シートを示し、視覚的、全体的に計算などを書くと、混乱せず間違えないでできることを説明した。

この「学習アセスメントシート」によるフィードバックをした後の生徒の様子について、高校の教員によると、生徒らが教室に戻って「俺は同時型だったよ」「私は継次型だった」などと互いに盛り上がり、「こうすれば勉強しやすいと言われた」などと楽しそうに談笑する場面が見られたという。また、検査の時は暗い表情の生徒も多かったが、フィードバックの時は嬉しそうにしていたのが印象的だったと話していた。このことから、当然のことながら、検査を実施して専門家や教員で情報を共有するだけでは不十分であり、生徒がもらって嬉しいフィードバックを遂行することが何より重要であることが再認識できた。

以上より、まず生徒自身が得意な認知方略を自覚し、自信を失うことなく自己理解を促進するとともに、教員も生徒の認知方略に関する情報を共有し、日常の授業や生活指導に活用できることが重要であると思われた。

また、今回のクラス単位での KABC-II 実施により、教員らが、継次処理や同時処理といった認知方略に関する知識を持つことが出来、生徒の得意な認知方略を学習や授業に取り入れようとの構えができたこともその効果としてあげられた。実際、その後の A 高校の学習相談で、KABC-II を個別実施するケースもいくつかあり、教員らにとって、この A 高校に在籍する生徒たちを指導するには、生徒の能力や特性を把握する必要性を強く感じたという。このように、認知処理方略という観点からの授業や指導が教諭らの共通言語になったことも一つの効果であった。

本研究実践では、学習が苦手な生徒が在籍する公立高校において KABC-II をクラス単位で実施した。生徒の得意な認知方略を、生徒へ分かりやすくフィードバックを行うとともに、教員との事例研究などを通じて、生徒の認知特性を活かした指導に関する議論を行った。その結果、学習習得度のみを勘案するのではなく、生徒がどのように学習すれば理解や定着しやすいかという共通の認識を、生徒と教員が持つことができ、その後の学習指導に活用できるという成果があったといえる。

今回実施した A 高校のように、学習が苦手な生徒が多数在籍する高校は、地区ごとにあり、定時制や単位制高校でも学業面の課題を抱えている生徒が多い。そこで、こうした高校に在籍する生徒に KABC-II を実施し、その結果を生徒や教員にフィードバックすることは、生徒が自己理解と教員の指導援助方針を作成するために、今後ますます必要になってくると思われた。

今回の研究実践では、上記に述べた A 高校に加えて、特別支援学校の B 高校、定時制チャレンジスクールの C 高校においても、同様の取り組みを行い、学習の困難やつまづきを感じている生徒に対して、日本版 KABC-II の実施と、説明用シートを用いたフィードバックを生徒、保護者、担任教諭に対しても実施したものである。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

熊上崇、熊谷恵子ほか 「公立高校1年生の数学学習熟度別クラスにおける KABC-II の実施とフィードバック」 (印刷中)
KABC アセスメント研究 17 巻、2015.7 発行予定

② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

藤田和弘、熊谷恵子、熊上崇編著、図書文化「長所活用型指導で子どもが変わる 思春期編」 (印刷中) 2015.7 発売予定

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

日本LD学会 自主シンポジウム「新しいタイプの高校における学習支援と生活指導」 2014年11月24日 大阪国際会議場

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

日本LD学会発表 「公立高校1年生の数学学習熟度別クラスにおける KABC-II の実施とフィードバック」
2014年11月24日 大阪国際会議場